

議事録

平成 27 年 第 10 回建設トップランナーフォーラム 地方創生のトップランナー・10 年の軌跡

日時：平成 27 年 6 月 30 日（火）9:30～18:00

場所：日本建築学会建築会館ホール

○開会のことば

日本青年会議所 2015 年度建設部会長 飯田誠次郎

- ・私は、本年度、日本青年会議所の建設部会長を務める飯田です。
- ・本日は、国土交通省、農林水産省、経済産業省をはじめとする各省庁の皆様、アドバイザーの皆様、多くの来賓の皆様、全国よりお集まりいただいた参加者の皆様、ありがとうございます。
- ・本フォーラムも今回で 10 回目となる。私も 1 回目からこのフォーラムに携わらせていただいている。皆様に助けられ、育てられ、愛されて、年を重ねるごとに発展を続けてきたと思う。
- ・昨年はこれまでの成果に加え、担い手の人材育成というテーマを追加した。
- ・我々、全国 26 の地域の建設クラブを持つ当建設部会としても、この問題に着目し、建設業の魅力を再認識し、発信していくということを現在進めている。
- ・本日も数多くの事例発表、パネルディスカッションが予定されている。本フォーラムをきっかけに皆様の地域の建設業がさらに元気になっていくことを祈念して、私からの開会の挨拶とする。本日長丁場となるが、最後までよろしくお願いします。

○歴代日本青年会議所建設部会長挨拶

① 加藤徹

- ・歴代なので、10 年前の私から始める。長丁場のオープニングなので、手短かに話させてもらおう。
- ・10 年はあっという間で、プログラムもシナリオも何もない中で、地方の建設業が元気になって欲しいなという J C のみんなの思いだけで、始めた。
- ・当初失敗だらけで、こんなにきっちりとした会ができることになったのは、本日お越しいただいた皆様のご支援のおかげ。
- ・10 年の軌跡を今日、皆様とともに楽しんでいきたいと思うので、どうぞよろしく願いいたします。申し遅れましたが、加藤と申します。

② 奥田孝行

- ・私は、第 3 回を担当した、石川から来た奥田と申します。
- ・3 回目となると、皆さん少しずつ興味を持たれてきて、石川県からも何人もこのフォーラムに参加させていただいた。
- ・今では石川県でも、異業種に取り組んでいる企業もかなり増えている。
- ・このトップランナーフォーラムを通じて私自身もいい経験をさせてもらったし、いい勉強もさせてもらった。
- ・あっという間に 10 年なのかなと、頼もしく思うし、皆さんこのフォーラムを参考にして、地元を持ち帰っていただいて、企業をバックアップしていただけたらと切に思う。

- ・今日は私も、久しぶりにトップランナーフォーラムを楽しみたいと思うので、どうぞよろしくお願ひします。

③ 久力一雅

- ・1回目から本フォーラムの開催実行委員をしている。皆様から厚い支援を受け、このフォーラムは10年間にわたり継続している。感謝申し上げます。
- ・本日は私も楽しみたいと思っている。

④ 志多充吉

- ・2011年開催の幹事を担当した。当時は東日本大震災が発生したことから、急遽完成していたプログラムを変更し、災害・復旧に関する建設業の取組を紹介した。
- ・建設業者が災害にどう取り組んできたか、今回のフォーラムでも紹介したい。

⑤ 金田健治

- ・2012年に会長を務めた。
- ・2011年に東日本大震災が起こり、翌年の2012年は復興元年であり、東北に何度も足を運んだ。現在もまだまだ復興されていないと思うが、引き続き皆様と一緒に、復興と日本を元気にしていきたいと願っている。

⑥ 河合良紀

- ・昨年会長を務めた。
- ・昨年の第9回建設トップランナーフォーラムでは実行委員長深松組さんの元、チーム宮城で務めることができた。
- ・9年という歴史を先輩方に失礼の無いように、ご参加いただいた皆様に失礼の無いように勤めさせていただいた。感謝申し上げます。

○特別挨拶 元国土交通事務次官 青山俊樹

- ・建設トップランナーフォーラムの10周年をお祝い申し上げます。
- ・続けてこられたこと自体がすばらしい。
- ・建設業が担っているインフラ整備や災害対応は尊い仕事である。
- ・高い「志」と「誇り」を持って事業に取り組んでいただきたい。
- ・地方創生の主役は「志」を持った建設業である。

○歴代アドバイザー・ご支援者挨拶

① 松嶋英機

- ・弁護士であるが、米田先生が建設新事業研究会を主催しており、国交省や県、地方建設業の集まりに参加していた。当時、勉強会に加わったのは、弁護士として会社再建を専門に仕事していたため。また、実家が地方の建設業というところも繋がりがある。
- ・最近では、地域経済活性化支援機構の再生委員会で委員長を務めており、近年、地方再生に深く携わっている。安倍政権の地方創生に尽力している。
- ・これまで620社支援したが、再生しただけでは地域は活性化しない。
- ・また、建設業だけの経営では将来的にどうかと思っている。早くから多角経営しないといけないと感じている。このフォーラムで発言する企業はそういう方向で取り組んでいる。

- ・現在経営人材マッチングの会社設立を予定しており、建設業と異分野を交えた雇用の創出が必要だと考えている。
- ・少子高齢化の中、若い人に雇用の場を作らないといけない。このフォーラムの目指すところである。

② 沼田正俊

- ・10年目、喜び申し上げる。
- ・昨年林野庁を退官した。
- ・森林分野でも建設業は活躍している。インフラの町医者として活躍してもらっている。林建協働に敬意を表する。
- ・東日本大震災以降いろいろあり、地方創生、国土強靱化がキーワードになっている。いろいろな政策が展開されていくと思うが、政策を実行に移すのは地域で活躍する方々である。
- ・地域で頑張る企業に支援・協力していきたい。皆も高みを目指してほしい。

③ 鷺坂長美

- ・トップランナーフォーラムは1回目から携わっている。
- ・地方の建設業は、日本の経済がよくない、あるいは公共工事が減らされるといった中で大変だった。
- ・地方の建設業はインフラの基盤である。
- ・国土を守るためには地方の建設業が活性化しないといけない。こういったことからフォーラムを始めたと思う。
- ・トップランナーの皆さんはいろんな分野に進出していると思うが、東日本大震災のときは災害対応でいち早く出ていったと思う。
- ・また、30年前大分県に出向したときに、一村一品運動という地域活性化の取り組みがあったが、当時の知事が継続は力なりと言っていた。
- ・フォーラムは10年たったが、その次の10年と継続してほしい。担い手の一端として活躍してほしい。

④ 新山誠

- ・「明日の日本をつくる北海道」を基本にして、ファイナンスとして15年支えてきた。また、その前は、青山さんや大石さんと働いてきた。
- ・建設マネジメント研究委員会を立ち上げ、全国区でも組織できたところ。
- ・東日本大震災があってから、絆を強くして前向きに日本をつくるのが大事。
- ・明日を築く絆を作っていきたいのでよろしくお願ひしたい。

○基調講演 建設トップランナー倶楽部代表幹事 米田雅子

- ・2006年から始めた本フォーラムは今年で10周年を迎えた。
- ・本日は国務大臣をはじめ、各省庁や関係機関から60人を超える来賓の御出席をいただき、また、多くの方に参加してもらい感謝申し上げます。
- ・建設トップランナー倶楽部は、公共工事が減少するなか、夢をもって新事業に挑戦してきた建設業者の集まりである。全国55社の幹事、600社の参加企業、日本青年会議所建設部会、地方建設新聞30紙が、22道県の建設新事業施策研究会とともに、地域の雇用と社会基盤を守るため、業種

の壁をこえて地域産業をおこそうと建設業の複業化を推進してきた。

- ・10年前建設業者が本格的に農業に参入した時には、法律や各省庁の制度の壁にあたった。最初は農林水産省の補助事業は使えなかったが、農業生産の実績が挙がるにつれ、農地法が改正されるなど、企業の農業参入を国が支援してくれるようになった。また、農商工連携により地域の商工業者との連携を支援してくれるようになった。
- ・林業との連携では、林業の基盤整備として“崩れにくい作業道”の整備などを林野庁が施策に反映してくれるようになった。
- ・岐阜県の皆様とともに林建協働を始めた当初、林業界の協力を得ることは難しい状態であったが、作業道が完成するにつれ、林家にも喜んでもらうことができ、Win-Win の関係を築くことができた。
- ・企業の新分野進出は縮小する公共工事の代替策として国が支援するところとなったが、地域のニーズに合わない、国の補助金に頼りきった、本業の片手間の新分野進出であったなどの理由により倒産する企業も相次いだ。
- ・そこで、建設トップランナー倶楽部では建設業者の複業化を目指した。「複業化」とは複数の本業を持つことである。本業を複数持ち、組み合わせることで相乗効果に期待している。
- ・例えば、建設業と農業では同じような機械を利用できるだけでなく、繁忙期のずれにより年間事業を平準化することができる。
- ・建設業と林業では作業道の整備と機械化により、木材搬出量を増やすことができ、また建設工事に木材を利用することで地域材の利用促進が図られる。
- ・建設業の介護参入では介護サービスだけでなく、快適な施設づくり、リフォームができる。
- ・他にも、建設トップランナーフォーラムは、環境ビジネス、地域ブランド、観光振興など、地域に必要とされる複業化を進めてきた。
- ・こうしてたとえ農業や介護の利益はそんなに多くなくとも、相乗効果で経営を安定させて、地域に役立つ企業となっていく。
- ・このような取組で地域が必要とする企業になることで、地域と共に発展してきたと言ってよい。
- ・建設業の複業化はこれからの地方創生で有効な手段となる。過疎の進む地域では市場が小さく、ひとつの事業では自立が難しい。
- ・経済理論では、市場の大きいときには専門分化することが効果的であるが、人口が減って市場が小さくなるときには複数の事業を持つことが有効である。
- ・10年を経て、過疎地の雇用の最後の砦として総合産業になった企業も多くでてきた。地方創生においてI・Uターン者を受け入れている地域が紹介されているが、その過疎地域には複業化で地域を支える建設業が頑張っている。縁の下の力持ちとして地域を支え、従業員に給料を支払い続ける建設業者にエールを送りたい。
- ・建設トップランナー倶楽部では本業の強化や複業化だけでなく、時代の変化に応じて業態を変えていくことも大きな目標としている。最近では海外に進出する企業も増えてきた。
- ・また、建設トップランナー倶楽部では、「インフラの町医者」を目指して、日本列島の地域防災の最前線、老朽化するインフラの守り手としても大きな役割を果たしていただきたいと思う。道路啓開の先頭に立ち、建設BCPをすすめる、インフラの維持・管理における技術開発や共同受注方式の提案など、数々の新しい事業を展開してきた。

- ・建設トップランナー倶楽部の各社は災害時には迅速に対応するだけでなく、日頃から防災訓練を行っている。またインフラ整備・維持管理の技術開発や共同受注方式など新しい提案もしている。
- ・東日本大震災で見た東北建設業者の働きは素晴らしかった。建設業者の60%が発災から4時間以内に活動を始め、各地で復旧活動の先頭に立って地域を支えた。これは奇跡だ。
- ・災害の多い日本には地域を守る建設業者が必要であり、そして、社会資本の整備をはじめ地方創生には欠かすことができない。
- ・本フォーラムでは多くの課題を乗り越えながら着実に発展してきた建設業を見て欲しい。そして、次の10年に向けて建設業の力を活かした地方創生のあり方について議論できたら良いと思う。
- ・建設業の本来の使命を果たしながら、安定的に次の世代を育てるそんな業界になることを期待している。

○来賓挨拶

① 国土交通大臣 太田昭宏

- ・建設トップランナーフォーラムが10回を数えたということで、心からお祝いを申し上げます。
- ・10年前に出席して以来、何度か出席したが、1番最初のスタートは若い人達が集まっており、その当時、公共工事は悪玉であったり、無駄遣いであったり、事業が削減されてなくなってきたりという中で、どうやって建設業界が各地方で生き延びていくのかということ工夫し、農林業との連携を図るとか、技術的に新しい建設業を模索するとか、いろんなことを前向きに展開してくれたエンジン役が、正に皆さんだと思っている。
- ・そういう意味で、私は10回目を数えるということに、万感の意味をこめて、皆さんにありがとうと御礼を申し上げたい。
- ・私が国交大臣となって2年半が経った。公共事業は悪玉であり、公共事業は無駄でありという状況であったが、無駄な公共事業はあっても、公共事業は無駄ではない。
- ・そして、東日本大震災後を考えてみても、あるいは2年6か月前の笹子トンネルの天井板落下事故からしても、日本の中で、防災、減災、老朽化対策、メンテナンス、耐震化、この部分が極めて大事。これからの公共事業のひとつのメインストリームは、間違いなく防災、減災、老朽化対策、メンテナンス、耐震化という部分である。
- ・そしてそれを担っていくのは、町医者たるべき各県における工務店であったり、ゼネコンと位置付けさせていただく。
- ・私がこの職に就く前は、数えたことはないが、防災、減災、老朽化対策、メンテナンス、耐震化というのは、30数パーセント、恐らく1/3位の予算がそうだったと思う。私は、予算のいたい50パーセント以上を防災、減災、老朽化対策、メンテナンス、耐震化ということに使い、それ故に「我が町は、我が地域は、我が地域にあるインフラは、私達が守るんだ」という気概を持って、町医者の建設業の皆様にも担っていただく以外にない。
- ・橋梁等が1956年頃から80年くらいまでの15年間で毎年1万橋ができていた。今は千くらいの新しい橋ということになっているが、それはそのまま新設の山ではなくて、メンテナンスの山が来ることになる。
- ・だから、技術革新をして、世界の先頭に立って、メンテナンスエンジニアリングという世界最先

端の技術を現場の皆様方に持っていただいで、世界をリードするという時代を築いていただきたいという思いを込めて、この2年半、私は仕事をさせていただいた。

- 3月1日に常磐道が全通し、1週間後の3月7日には中央環状線が全通し、3月14日、1週間後には北陸新幹線がスタートを切り、翌日の3月15日には淡路から徳島のずっと奥地まで高速道路が繋がったし、翌週の3月21日には念願の東九州自動車道が繋がったし、翌日の3月22日には尾道、松江というのが繋がり、松江から尾道、しまなみ海道を通過してそのまま愛媛に入るといった大きな流れもでき、翌週の3月29日には、初めて高速道路が道東に入ることとなった。
- 来年の今頃には神奈川県から相模原、八王子、上尾をずっと通って成田まで全通する。
- この間、上尾に行ったが、「上尾は埼玉県の北の外れとみんな思っていたけれども、ここからさいたま市と東京を見下ろしてください」と、「もう上尾は埼玉の北の外れではない、右手に湘南を、左手に成田をつかむことのできるそうした町作りになるんだ」という話を、ちょっと大風呂敷を広げたかもしれないが、お話をさせていただいた。
- 今まで公共事業を、どれだけ投入したらどう動くかというだけのフローで図ってきた。今日の夕方には、成長戦略、あるいは再興戦略、あるいは骨太といったものができるが、今年初めてストック効果というものが、そこに出るようにした。
- 防災、減災、老朽化対策、メンテナンス、耐震化を担っていただくのは、正に建設トップランナーに参加する皆様の若い、また、力強い意欲に満ちた力なくして、これを担うことはできないと思う。
- 同時にまた、もう一つ大事な、このインフラのストック効果ということに思いを馳せて、日本の大きな成長のエンジニアという役割を果たしていくという、そうした展開、流れが初めてできてきたところ。
- これは当たり前のことだが、当たり前の状況が、いよいよ国家の戦略の中で、道を開いてきているという筋道を作ったところ。
- 本当に皆様方が苦しいときも頑張って、そしてどうやって自分達が生き抜いていくか、そして生き抜くということが、地域にどれだけ大きな力となっているかということ、粘り強く皆様方にやっていただいたから、私はこんな話ができる。
- 大変な中ではあるが、皆様方に心から感謝を申し上げまして、御挨拶とさせていただきます。

② 国務大臣地方創生担当 石破茂

- 地方の人口減少がこのままの勢いで進めば、西暦3000年には日本の人口は計算上1000人になる。
- 昭和30年から45年の間に人類が経験したことのない規模とスピードで地方から東京に500万人が集まった。
- これからはこの裏返しが起こり、高齢化が進むことにより東京は未曾有の高齢化が進む。
- このまま地方の人口は減少し、高齢化率は高止まりのままだが、人間は不老不死ではないので高齢者の人口は減少する。そうするとやがて地方の若い医療スタッフの東京への招致が起こるが、東京の出生率は最低であり子どもが生まれず、やがてこの国はなくなる。
- 東京は消費、地方は供給の役割を担っている。消費を担う東京だけが生き残ることはありえない。
- 昭和40年代半ばからの10年だけを見ると、地方では人口が伸びている。理由としては、公共投資と企業誘致である。

- ・しかし、かつてと同じことを現在行うのは困難である。
- ・かつてのように公共事業と製造業の企業誘致で雇用と所得をもたらすことはできない。
- ・今まで潜在力を最大限発揮してこなかった農林業・他のサービス業の生産性をどれだけ上げ、地方の雇用・所得に結びつけるかが国家の喫緊の課題である。それを今実施しないと、恐らくいつ何をやっても無駄である。
- ・建設業は他産業との親和性は一番高く、「地方創生」に果たす役割は極めて大きい。
- ・今後公共事業が増えることは難しい。これまで培ってきた建設業のノウハウをその地域資源を最大限に活かすことができるかが、本トップランナーに参加されている方々の考えと拝察している。
- ・アジア諸国でも今の日本と同様の問題がおきる。日本が本課題を克服することは、国際社会へ果たすべき責務である。地域において中核を担ってきている建設業方々が次の時代のために、そして世界のために力を尽くしていただきたい。

③ 元国土強靱化大臣 古屋 圭司

- ・6月16日に国土強靱化アクションプランが本部決定された。米田先生が長年取り組んできた異種の道をアクションプランに盛り込ませていただいた。地方版のアクションプランは、岐阜県が全国に先駆けて策定した。北海道は選挙があって少し遅れてしまった。
- ・建設業者（土建屋さん）は、地域密着であり地に足を付けている。これが弱みであるが強みでもある。強みをしっかり活かせばビジネスチャンスは沢山ある。
- ・骨太の方針2015年版も、自民党総務会で本日承認された。地方創生と国土強靱化は両輪である。
- ・国土強靱化でしっかりと条件を整備し、地方創生で実施に移していく。
- ・地方創生の閣議決定も間もなく承認される。一番大事なことは、東京の企業や中核的な研究施設あるいは国の機関を地方に移転させること。これを国策として総合戦略にも盛り込むことを石破大臣にもお願いしたところ。
- ・企業の本社機能のあるところは、地方公共団体の財政力指数も高い。地方はトップセールスで、企業の移転を実現していくことが大事である。骨太の方針に、しっかりとCLTも盛り込ませていただいた。
- ・地方創生と国土強靱化を推進することで、地方にビジネスチャンスが広がり、経済効果が地方に波及するよう取り組んでいく。

【第1部 地方の創生に挑んだ10年～縦割りを超えて地方を元気に～】

アドバイザー：佐藤速水（農林水産省農村振興局農村政策部長）

岩井英二（経済産業省審議官（地域経済産業政策担当））

○再生可能エネルギーと黒部宇奈月振興 大高建設 富山県

[アドバイザー講評]

（農林水産省 佐藤農村政策部長）

- ・地方創生、地域活性化のモデルになる事業と思う。
- ・この地域は日本一の急流、半永久的に砂防事業をやらないと地域の安全の確保が図れないところで、長年、山岳土木を行っているだけでも大高建設には頭が下がる思いのうえに、市町村合併で地域に目が届かない行政に代わって、未利用資源を活用しつつ、さらに観光に取り

組んでいる。まさに地方創生のモデルとなる取り組み。

- ・まち・ひと・しごと創生本部で、今後の地方創生の目玉として重点的な取り組みが期待できる分野として、観光を上げている。本日各種の計画が閣議決定されているが、共通しているのは、観光、インバウンド、外国旅行者を地方創生、地域の活性化に取り込んでいこうという取り組み。大高建設のこの取り組みはその最先端を行っている。
- ・観光と言うときに、どこにターゲットを絞ってやっていくか、日本国内、外国にするか。外国といっても地域によって趣向が違う。冬場の観光客の呼び込み。こういった課題をどうやって解決していくかが今後の鍵。
- ・雇用の場も生まれているし、民間の力を結集して永続的な事業として発展できる可能性も高いし、期待も持ちながら注目していきたい。

(経済産業省 若井審議官 (地域経済産業政策担当))

- ・地方創生という言葉が一般の人が普通に使う言葉になり、うれしい。
- ・これはすばらしいと思った点があるのでコメントする。
- ・最初に観光の話。これから地域に観光で人を呼び込んで行くためには、旅館の方だけではなくて、地域の担い手としての、建設業や農業の方がしっかりと入ってこないと振興が進まないと考えられている。石破大臣もいつも言っているのが、観光や地域おこしのキーワードは「ここだけ、いまだけ、あなただけ」。地元の方が宇奈月にしかないものは何なのか、考え尽くす、探し尽くす、そして磨き上げる。こういったことがそこにしかない宇奈月を作っていくうえで重要なポイントとなる。
- ・エネルギーに着目したのは非常に重要なポイント。使われていないエネルギーをどのように使って行くのか。手間のかかる地熱、小水力や熱循環を使ったものは、なかなかおもしろい取り組みと思う。
- ・地方に移住する方は、そこに行けば新しいことが出来るということが大きな誘因になる。こういったイメージを大きく展開しながら進められればよい。

○森林再生・農業・馬育成の津軽振興 竹内組 青森県

[アドバイザー講評]

(農林水産省 佐藤農村政策部長)

- ・説明を聞いて、もっと事業の拡大の可能性があると感じた。というのは、地方創生の取組みの方向としては2つの方向があると思う。
- ・一つは、地域にあるものを活用してお金が地域の外に出るのをなるべく減らしていく、いわゆる地域内の経済循環である。いままで石油に頼っていたものを地域資源であるバイオマス燃料を活用して、地域外に出ていく石油代を減らすというもの。
- ・もう一つは、地域の外からお金を積極的に取り込んでいくもの。
- ・竹内組の話は、どちらかと言えば地域内循環に軸足をおいているのではないかと思う。中泊という地理的な状況を考えるといつまでも国からの助成金が期待できるものではない。そのあとを見据えて、地域の外から人を呼び込むことも視野に入れてやっていくと強くなるのではないかと思う。
- ・何も無いところにいかに人を呼び込むか、何も無いことが売りになる時代がようやく来た

思うので、ぜひ、今後の発展を期待したい。

(経済産業省 若井審議官 (地域経済産業政策担当))

- ・地域の活性化には、若年層の雇用確保、一次産業の活性化、企業の地域貢献、これが重要であるとの話があったが、まさにそのとおりである。
- ・ただ、中泊町という小さなエリアの中では個々の事業を大きくすることができないという状況の中で、米田先生のいう複業化が非常に大きな効果があると思う。
- ・経済学的にいうと、生産性を上げるため「規模の経済」、「範囲の経済」があるが、「規模の経済」を追求するということは一つの製品をたくさん作ることによって、効率化を図るということ、一方「範囲の経済」は、ある閉じた中でいろいろなことをやっていくことで、全体の効率を上げていくということであり、そういう意味でも、この取組みは理にかなったものであると思う。
- ・さらに、今のプレゼンで感心したのは、それぞれの事業に対して必ず検証があることである。民間の事業者としては当たり前のことだと思うが、地方創生の取組みを行う中で、行政の取組みについて必ずPDCAサイクルを回してほしい。中身を構想するだけでなく、しっかりと検証することが地域創生の肝となる。
- ・高齢者の地方移住についてであるが、このまま東京圏に介護施設をたくさん作り続ければ、そこで働くために地方から若者がどんどんいなくなる。日本全体としての最適解をしっかりと考えていきたいと考えている。

○各地のトップランナー紹介

(勝電気工業 (青森県)、武佐興産 (富山県)、フィディア (鳥取県)、稲田建設 (高知県)、フルージック (岐阜県)、みのり建設 (長野県)、山形環境荒正 (山形県))

[アドバイザー講評]

(農林水産省 佐藤農村政策部長)

- ・農山漁村、中山間地域は、所得源が一つではなく、いろいろな所得源を組み合わせ生活しているというのがこの地域の一般的な姿である。
- ・建設企業の皆さんも多様な所得源をもって活動しているということが分かった。
- ・多様な所得源、事業の多角化には、多様な人材が必要になってくる。
- ・農山漁村、中山間地域の人々が多様な所得源を持ち、企業も多様な事業展開を行っており、これを組み合わせているのが現在のみなさんの活動だと思うが、考えようによっては、しなやかで力強く、そう簡単につぶれない社会、組織になるのではないかと感じた。
- ・地方消滅の危機が言われているが、このような取組みを続けていけば、必ず、課題解決の道が見つかるのではないかと感じた。

(経済産業省 若井審議官 (地域経済産業政策担当))

- ・地方ならではの豊かな暮らし方が大事との話があったが、地方でそこそこ暮らしていけるといのはある意味で強い持続可能性をもっているということである。
- ・地域の担い手である建設業の皆さんが、地域の基幹産業である農業・林業に参加することにより地域を支えていくというのは、大いに意味のあることである。
- ・中心市街地の活性化については、地方の都市にとっては非常に大きな問題であるが、基本的

な方向性は、既存のストックをどのように活用していくのか、これが大きな問題となっている。

- ・中古の住宅や建築物にどのような価値を持たせていくのか、取組みをばらばらにやるのではなく、行政などと連携し大きなプランの中で、しっかり制度として作りこんでいかなければならない。
- ・いかに地域でお金を回していくかということが非常に重要である。(株)フィディアの取組みについて、特定目的会社を作り、介護施設に対して比較的小規模な経営資金を得られているということは、非常に先進的な取り組みだと感心している。
- ・さらに、介護サービスというのは今後非常に大きな需要が見込まれるものであり、特に地方では、地方に移住して豊かな老後生活を送りたいという方にしっかりとした選択肢を提供する、そのための仕組みづくりが非常に重要であると思っている。
- ・地域で重要なのは、人づくりであり、故郷に誇りを持つということが地元から離れることの大きな歯止めになる。教育の中にその誇りを活かしていくような皆様の取組みは非常に重要だと思っている。

【パネルディスカッションⅠ 「地方創生のトップランナー・10年の軌跡とその未来」】

パネラー：谷口博昭（国土技術研究センター理事長）、西山周（愛亀社長）、野津一成（美保テクノス社長）、住田高寿（住田建設社長、元 JC 建設部会長）

コーディネータ：荒木正芳（北海道建設新聞社社長、元建設トップランナー倶楽部幹事長）

荒木 トップランナーフォーラムは、初回から非常識な会で、本日もパネルディスカッションを二つやるというちょっとないような仕立てになっている。

この10年間、様々な活動をやってきましたし、いろんなところでいろんな発表の場を設けて、皆さんと意見交換させていただいた。今から1時間くらいのパネルディスカッションⅠの方は、その思い出とか、あるいは、これからどういう方向に向かうのか、皆さんでざっくばらんに、関係深い方、初回から参画されているメンバーもいらっしゃいますので、お話をお伺いしたいと思います。

資料集の28ページ、29ページを見ていただければと思いますが、実は、この資料集は、私が作りましたが、オールカラーで、いろいろがんばってやりました。今回のパネルディスカッションのパネリストの皆さんのフォーラムとの関わりは、この資料集を見ていただければ分かると思いますので、割愛させていただきます。

それでは、最初にまずパネリストの紹介を、ちょっと時間がないものですから、私の方からご紹介をしたいと思います。

私の隣から、愛媛から、愛する亀と書きますが、愛亀社長の西山周様です。そのお隣です。鳥取県からお越しいただいた、美保テクノス社長の野津一成様でございます。そのお隣です。愛知県からお越しいただきました、住田高寿様でございます。このフォーラムでご承知かと思いますが、国土技術研究センターの谷口博昭理事長でございます。

本日、米田雅子代表幹事の方から基調講演が午前中にありましたが、その中で建設業の厳しい状況を打破しようということで、夢と希望を持って新しいことに挑戦している全国の建設の経

営者が集まって、発表の場を作りたいということで、平成18年に第1回目を開催いたしました。

それぞれが地域の中で取り組まれている事例を発表して、お互い意見交換をしながら、刺激をシェアする場が第1回目でした。当時、建設業の社長さんが「うち、今度農業をやる」と言う話をすると従業員が「うちの社長、気が狂ったんじゃないか」とか、「もう、やめてくれ」というような、そんな時代でした。いろいろ奇異な目で見られて、業界の中でも非常に変わり者みたいなような、そういう中でも皆さんが真剣に取り組まれて、今新しいビジネス自体も花開いているという状況があります。その中でこの10年、活動に参加したきっかけ、あるいは、思い出深い印象を、皆様から簡単に一言いただければ。西山社長からよろしく申し上げます。

西山 それでは変わり者のトップバッターということでもあります。

実は、建設トップランナーフォーラムの前身に建設帰納研究会というのが、2年くらい前にありましたが、荒木社長も当初からのメンバーで、これに参加することになりました。54ページに、興味深い写真が実は出ています。東工大で最初のトップランナーフォーラムをやろうという企画会。この会が何であるかということ全く知らされないままに参加して、どんどん事が運ぶ米田先生のスピード感というか、改革力というか。それに圧倒されてここにいるというのが、正直なところでもあります。いろいろこの10年、隔世の感がありますが、どれも印象に残っております。

その中で一つあげるとすれば、2011年の震災の年のフォーラムの担当幹事で、いきなり当初予定していたプログラムを全部やめて、(震災が)3月でしたから、(フォーラムが)7月でしたから2ヶ月半くらいしか実はなかったのですが、それをてんでこ舞いでやったなど。住田さんも一緒に東北各地に、震災の2週間後に行ったと思うのですが、生々しい話とか、それでいて「地域の建設業が結構やはり力強いなあ。」「勇気をもらった」というのが最も印象深い記憶であります。

野津 鳥取県米子市から来ました。先ほど福井さんが話されましたが、人口14万の都市から来ました野津でございます。私の思い出は、この10年間、非常に我々が逆風を受けたが、このフォーラムに出ますと、米田先生はもちろんですが、谷口前事務次官さん、大石さん、それから和田先生が、我々を励ましていただいて、本当に勇気づけられて会社に帰ったというのが一番の思い出です。

住田 愛知県から参りました住田と申します。よろしく申し上げます。私は、2006年からこの会に参加させていただき、お手伝いさせていただいた。今日も大勢来ていますが、日本青年会議所の建設部会という会があって、そちらの役員に2006年から出向させていただいた。その当時、加藤部会長が部会長をされていて、初回からお手伝いをさせていただいた。やはり一番印象に残っているのが、一番初回の時。初回の時は、3部会に確か分かれていて、2日間でしょうか、前夜祭と次の日の1日かけて3部会を行った。お手伝いをする方も大変でしたけども、発表される方も非常に用意も大変だったと思いますし、各大臣もいらっしゃいましたし、ご来賓の方々も大勢いらっしゃいまして、大変すばらしい会だと印象に残っております。

谷口 谷口です。私は、「牛に引かれて善光寺参り」ということがあります。米田先生に引かれて、この10年間、建設トップランナーに付いて来て、多くの御利益を得たなと思っております。

この10年間は、政治的にも、今、東日本大震災の話がありましたが、波瀾万丈の10年ではなかったかなと思います。道路公団の民営化が今年10年の節目を迎えますし、私は国土交通省

の事務次官で、2ヶ月弱、岐阜の高山の金子一義先生にお仕えしましたが、よもや政権交代で、民主党政権の名だたる前田大臣にお仕えするとは、つゆ思っておりませんでした。

前田大臣が民主党政権の大きなテーマのコンクリートから人へということで、かなり乱暴な導きをいただきまして、皆様にもご迷惑をおかけしたと思いますが、このトップランナーで学ばせていただいて、先ほどお話しがありましたが、中部建設青年会議という、今から四半世紀前、25年前ですが、その発足に携わらせていただいたが、若い人のパワーを時代が求めているのかなということが一つと、もう一つは官民連携できちんとやっていかなければいけないということ。これから人口が減るわけなので、官も民もそれぞれの役割分担の中で、力を合わせてこの困難を乗り越えていく新たな10年であって欲しいなという感じであります。

荒木 どうもありがとうございました。

資料集の54ページの日経コンストラクションの雑誌がありますけど、一番上に載っている角刈りの方は西山社長ですよ。そうですね。隔世の感がありますね。このとき、実は、「複業のすすめ」に建設トップランナー物語を私が執筆させていただいて、まだ私はタバコを吸っていましたが、東工大の1階のタバコのところで、二人してタバコを吸いながら、「今日は何の会議なんだ」、「分からないけど、とにかく米田さんに集まれて言われたから。」「また新しいこと考えてるんじゃないかな」というのが、この会議でした。そして、いきなり「荒木さんは新聞記者なんだから、字書くの得意なんだから書記をして」と言われて、書記をして、ホワイトボードに書いている写真です。

実は一回目のトップランナーはそれきりでやめるはずで、いかにも打ち上げ花火の感じでやりましたが、参加された皆さんがぜひ継続させた方が良くという話があって、フォーラムという運営母体をボランティアで立ち上げたというのがきっかけでした。

それで第1回目のフォーラムの時に、来賓として谷口理事長が、当時、国土交通省の技官のお立場で来賓の挨拶をしていただきました。それ以降、事務次官時代、芝浦工業大学の教授時代と、谷口理事長にはフォーラムにご支援いただいております、アドバイザー、あるいは来賓、交流会、いろんなところでご挨拶いただいて、我々を激励していただきました。そういう中で、理事長の方で、もう一度フォーラムが果たしてきた役割を整理していただければと思います。

谷口 私も大学に3年近く身を置いたが、大学の先生方というのは、持論は立派なんだけど、書物により知識はたくさんあるが、生きた知恵というのか、実践知と言われるものをこの建設トップランナーの10年間で学ばせていただいた点ではないかと思います。その上で具体的なインフラの町医者とか、農林水産業との連携とか、介護との連携とか、具体的な成果を上げているということが、他にもまして、トップランナーの成果・役割ではないかなと思っております。

よく「マネジメントとビジネスはどう違うんだ」と言われますが、マネジメントテクノロジー、技術経営というものを、講義をさせていただいたが、これからは、安倍政権のアベノミクス、成長戦略に乗っていかねばならないので、守りじゃなくて攻めないといけないということです。

マネジメントやPDCAサイクルで、今の世の中doがない。ちょっと下品な表現でいうと、PPPP、下痢状態。プラン、プラン、プランでD0に行かない。だから、リスクがあっても、D0。この建設トップランナーはその下痢状態を脱して、PからDへ行っているというところが、私が関心しているところ、誇れるところじゃないかなと思います。

荒木 ありがとうございました。これからほぼシナリオから飛びますが、具体的に実施へというお話

をしていただきました。西山さんは6次産業化、農業をやられたり、お酒も作ったりと。西山さんが今取り組まれている事をご紹介いただければと思います。

西山 その前に、実は1回目の企画会の時からいつも違和感とって良いのか、トップランナーという言葉が自分にはなじまないなと思っていました。私はトップランナーではなくて、せいぜい言えば、周回遅れのトップランナーと一緒に走っている。基本的には、地方建設会社、地域の建設会社かなという思いでしたので、決してトップだとか何かやっている訳ではなくて、要するに危機感を感じているから、先ほど谷口先生の話じゃないけど、プランだけじゃ駄目なので、実際やって失敗しなければ。失敗する人は決断力がある人だと思いますし。

うちは元来、舗装会社ですが、西日本は4月、10月は暇な時期です。発注は少し控え気味ですから、その暇なときに、その時にお米作り、無農薬の化学肥料でお米を作りましょうということで、重機のオペレータ、10人、20人に田んぼに行ってもらって、お米を作るということを始めて、その後、インフラ関連の会社がいくつか、私のグループの中で出てきて、ほとんど建設関連産業ですので、そこで人材を流動化している、玉を転がしているというのが、抽象的な言い方ですが、うちがやっている取り組みです。その中で農業というのが、商売上、公共工事の規模から考えると、お米作りなんか顕微鏡の世界かも知れないが、実はその中に地域の中ではユーティリティ性が高い産業ではないかなと思っている。作っているお米を例えば住宅会社の営業マンが宅配に行くとか、食品残渣は造園会社の連中がリサイクルをかけて田んぼに行くとか。そういういろんな混ざり合ったと言えればいいのか、要するに、工夫といえば工夫なのかもしれませんが、経営資源は何でも使いましょうというのが、今の取り組みで、6次化と言う形になっているのかもしれない。決してトップランナーではございません。

荒木 ありがとうございます。

今言われたトップランナーフォーラムという名前なんですが、実は命名者というのは、日経コンストラクションの当時副編集長だったアダチさんと言う方が、最初私のところに、「荒木さんは新聞記者なんだから名前を付けなさい」と言われて、もじもじしているときに、アダチさんが「トップランナーフォーラムがいいんじゃないか」と言うので付けたのですが、西山さんが「俺たちはトップランナーと言われるには抵抗ある」ということで、随分、当初、名前に非常に違和感を感じながらずっと進んできた。ただ今や周回遅れというよりも文字通りトップを走っている皆さんがこうやって生き残ってるんだと思います。

野津さんのところは、介護ビジネス、これも早い時期から準備されて、参入されておられて、今まさに成功されているのですが、介護ビジネスの概要をお知らせいただければと思います。

野津 介護ビジネスにつきましては、ここで一回話をしたこともありますので、今日も沢山ありましたし（省略します）。

私も40過ぎに社長が亡くなりまして、社長をやれということで、いわゆる建設コンサルタントという方にいろいろ勉強したわけですが、今から30年近く前ですけど、その先生方は「建設業をどうするかというよりは、建設業はいずれだめになるから新規事業に入れ」というコンサルタントだった。根拠があったどうかは分かりませんが、いわゆる世界で一番、公共事業は日本が多い、いずれは縮小する時代が来る。我々も肌で感じておりましたが、そういうことで20数年前から建設業の隙間を目指していこうということで始めたわけです。例えば、地方ですと重機とか舗装とかあって、それをリース会社にするとか、コンサルタントの会社を別会社にするとか、

建材の会社を M&A で買い取るとか。たまたま平成 12 年に介護保険法が改正になりましたので、（介護事業を）やったということです。しかもそのやり方も経営もさることながら、我々は建設業ですので、建物をどう建てたらいいか、安くするにはどうしたらいいか、というようなことをやっておりましたので、私もトップランナーというよりは建設業にしがみついて何とかやってきたということではないかと思っています。おかげさまで、売り上げの方もちょうど半分くらい、本業と副業の方が半分くらいになりまして、決してトップランナーではないと思っています。

荒木 ありがとうございます。

建設業の経営者の方は非常に謙虚な方でして、「自分がやったんだ」と言わない方が多いのですが、美保テクノスさんに実はトップランナーで視察に行ったことがあります。野津社長さんの運営されているいろんな介護施設を見させていただきましたけれども、当然、パートナーと一緒に、専門家とタッグを組んで新しい介護ビジネスに参入されたのですが、野津社長が介護制度について詳しいということに驚きました。

新しいビジネスに参入すると、そのパートナーに任せっきりで、例えば「俺は農業のことは知らないので、おまえに任せた」とか、あるいは「介護のことはおまえに任せた」と、経営者としてある意味、全くまかせっきりにして、最終的にはどうしようもなくなって、本業も含めて駄目になったケースが、実は全国各地でたくさんあります。そういう中で野津社長は介護制度のことを自分でパソコンで全部調べて、「今度、介護制度はこうなる」とか、その時説明していただいて、それが今でも印象深いですし、「やはり成功される経営者の方々は最終的には判断をきちんとされている、好奇心をお持ちなんだな」とその時強く感じました。

ここでまた谷口理事長にお話を聞きたいのですが、いわゆる公共事業がどんどん削減されて、新しい分野、新分野進出ということで、随分、その当時、いろんな施策なり、予算を投入しながら進めていったのですが、その時の状況や谷口理事長のその時の施策のお考えというか、どのような印象をお持ちだったのでしょうか。

谷口 公共事業を仕事としているので、結果、その公共事業を仕事としてやるというところに落ち着くのはやむを得ないんですが、入り口論として公共事業を考えると、うまくいかないんじゃないかと思う。

インフラ、最近ではフローではなくてストックという話がありますが、そもそも暮らしなり、産業なりを支えるインフラストラクチャーを公共事業費で賄っているという理解をもっともっと丁寧に説明していく必要があると思います。そういう意味では、公共事業費の大小だけを、対前年度伸びを意識するのではなく、もう少し根源的に、その地域にとって、地域の暮らしに、産業にとって何が重要かということを考える必要がある。平均値でなく、トータルではなくて、地域によって様々だと思う。それで、その地域が求めるものが、今言われるように、農業なり、介護なりというものがあれば、建設だけで産業として、業として成り立たなければ、そういうところへ進出していくということが重要だったんです。

公共事業削減は、十数年来続いているわけですが、今後、財政健全化計画なんかの議論をみると、公共事業費をそんなに大きく進展できる状況ではないという状況が続くと思う。そういう意味では、このトップランナー、先ほどから皆さん謙遜されているのですが、皆さんがやっている成功事例をそのまま真似るのではなく、そのプロセスなり、その精神を地域にあったような形でうまく学んで活かして、公共事業プラス農林水産業、若しくは介護とか、他産業と連携していく

ということが重要ではないかなと思います。

荒木 ありがとうございます。

理事長がおっしゃるように、本当に、成功事例が一人歩きして、それがあたかも全国の中で水平展開すれば同じように成功するという、幻想的な時代がありましたけれども、実際そういうところでは経営が行き詰まったりして、本業が破綻したりしている。随分、新分野進出の事例の陰にはいろんな企業があったと思う。

公共事業削減の中で、非常に部会の各会員企業が厳しい状況が続いていたと思うが、その時の打開策については若い人達の議論がありましたか。

住田 建設部会は全国組織で、ビジネスを中心とした会員の交流を通して、みんなで厳しいときにはお互いに助け合って、お互いの悩みを分かち合っていていこうと、震災が起こった時も物資を送ったり、助けに行ったりとか、やっておりましたし、全国ネットを活かして、本当に疲弊している地方もありますし、そういうところを何とかカバーしていこうということで、今もそうですけど、その流れで今もずっとやっております。

荒木 2011年の東日本大震災、あるいは3年3ヶ月ぶりに自民党政権に戻ったということで、地域の建設業を巡る潮目というのが明らかに小泉構造改革以降、変わってきたと思います。当然、公共事業の予算自身もある程度復活して、底を打って多少なりとも上がってきたという状況があって、当時本当に右肩下がり、どこまで下がるのか分からないという状況からは、随分一服感があると思うが、そういう中で本業が良くなってくると、「社長、米作ったり、お酒作ったりしてしょうがないんじゃないか」というのが、社内では出てこないんですか、西山さん。

西山 まったく想定外の質問です。まずそういうことはないと思ってます。というのは、社会がこの10数年構造変化していく中で、ものすごく様々なものが変わりました。単純に公共工事が減った、増えた、その変数だけではなく、人の気持ちとか、われわれの仕事の環境とか、社会の構造とか、人口構成とか色々変わりましたので、それぞれ危機感の持ち方も違って来たわけで、そういうことよりも、逆に新分野に入って行ったことをなぜだろうと思ってくれる社員もいるだろうし、そういう厳しい環境だなと実感する人たちもいるし、そういうことが年々醸成されてきた感じが私はしています。単純に数字が戻ったからなんてことはないだろうと思ってます。

荒木 それじゃ、野津社長、本業の方の今の現状をお知らせ願えれば。

野津 本業の方はいわゆるアベノミクスで、この3年くらい戻りつつあるという程度。今のところは順調だと思っております。

ただ、当社はグループ全部で570名くらいになっておりまして、これをどうしようかと思う一面、これからは若い人をいかに確保するか、その人さえあれば、どんなこともできると思っておりまして、そういう意味では将来に対して、人さえいれば何でもできると思っております。人がいないので何にもできないという状況じゃないかと思えます。企業誘致とか、相変わらず言っている人がいますけど、企業が来ても人がいないので、わざわざ東京から持ってきて、田舎だけ転勤でしばらくいてくれという状況だと思ってます。本業とか何とかじゃなくて、人間を確保するという会社というか産業というか、それがあれば十分ではないかと思っています。

荒木 どうもありがとうございました。

今、野津社長から担い手という話がありましたが、このあとのパネルディスカッションⅡの方では、まさにそれをメインテーマにしながら、インフラの町医者を目指してというテーマで、そ

の中でパネリストの皆さんが担い手の問題をもっと深めていかれると思います。

トップランナーフォーラムを10回数えて、それぞれ毎回どういうテーマで行くのか、歴代幹事が頭を悩ませて、今回はどういうテーマで行くのか、環境で行くのか、担い手で行くのか、知恵を絞りながら、皆様に刺激的な内容を提供するというので、絶えず取り組んできたわけですが、実は、本家・元祖インフラの町医者というのが、西山さんのところで、ホームページにインフラの町医者を目指すということで載せておりました。実はトップランナーフォーラムの最初の頃は、西山さんの会社は、金亀建設と言う名前でした。昔、松山城を金亀城と言っていた。そこからもじって金亀建設という名前だったのですが、そこから建設という文字をあえて取って、愛亀という会社になりました。なぜかという、さきほど総合サービス業という話がありましたけれども、建設は当然、柱にしなが、いろんな産業をくっつけながら、地域の総合サービス業に脱皮する思いも込めて、社名自身も変えられたというのが、10年間の中にありました。

そういう中で、これから今後、このフォーラムがどういうものをテーマに議論していくべきか、あるいはどういう方向性で進んでいくべきか、いくつか示唆をいただければと思うのですが、まず、谷口知事長の方から宜しいでしょうか。

谷口 公共事業だけを考えても駄目だということだと思います。

時の大きな国策に乗っかる、先ほど成長戦略、アベノミクスと言いましたが、今は地方創生ですね。その前は国土強靱化ということでありました。地方創生一色になってますよね。「国土強靱化、どこに行っちゃったの」という感じ。国土強靱化で具体的な事業は書いていないのですが、インフラは国土強靱化。従って、地方創生はこれまでの公共事業だのみではない、インフラは扱わない。石波大臣から漏れてくるんですね。これじゃ、私は駄目だと思うんですね。国土強靱化と地方創生をセットで考えていただく必要がある。そこに建設業がどういう役割を果たすかを考える必要があると思うんですね。

地方創生の有識者会議の有力メンバー、コアメンバーの一人に富山和彦さんという方がおられます。私が事務次官の時にJALのタスクフォースで乗り込んでこられたので、私、どういう人かあまりよく知らなかったのですが、彼はグローバルとローカルでは違うと言っている。「GDP的に言うと、ローカルが7割。グローバルは世界の競争があるので、やはり労務賃が安いところを転々とする。しかしローカルは地産地消的にサービスなので、地場な企業だ」と。そこにグローバル、スーパーゼネコンと違って、地域の建設業の価値を見いだす事があるのではないかと思います。

そういう意味では、国土強靱化は東京一局集中を下げて、分散型の国土形成、コンパクト+ネットワークがベースになると思いますが、地方創生はそういう意味では、東京の人口の一局集中を地方に分散して地方が活性化する、ということだと思う。そういう意味では、最近、年寄り介護ができないので地方に行けという論調がありますが、私はこういう発想ではなく、やはり若い人が地方に定住して、お年寄りも支え、それで地域の安全・安心も守れる、というような状態が地方創生の本来の役割、目的ではないかと思います。

そういう意味では、地方の強靱化、地方の安全・安心と地方の雇用、仕事と経済を支え、両立できるのが地方の建設業ではないかと思います。除雪も含めて、被災を受けたときに、3日間の初動体制、大きな生死をさまようような形で、3日間というのが区切りだと思うが、しかるべき地域に根ざして、いざという時に役に立つと思うんですね。その時に、災害頼みではやはり駄

目なので、建設業だけで、公共事業だけで事業が成り立たないのであれば、このトップランナーがやってこられたように、農林水産業とセットで業を営む、連結して営む、介護と営む、それが地域のそれぞれニーズに応じてやればいいと思う。グローバルはナンバーワンを目指すかも分かりません。そういう意味では、地方のトップランナーはオンリーワンなのです。オンリーワンというのは地産地消的なので、地域の固有のオリジナリティー、歴史文化、風土、気候、地形、地質、そういうものも関係する。そういうものを捉えて、やはり他地域と差別化できるような業を営んでいくということではないかと思います。そういう意味では、いろいろ工夫のしがいがあるかと思いますが、よく雇用でITとか言うが、ITを否定するつもりはありません。固有名詞を言うのは失礼かも知れませんが、シャープが亀山にどさっと液晶の工場を作った。グローバル企業はそういう意味では激しいのです。地産地消的に建設業の果たす役割を見直さないと、私は地方創生というのは、なかなか、今の政府の取り組みの延長上では、うまくいかないのではないかと思います。

荒木 どうもありがとうございました。

お隣の住田さんの場合は、新たな産業、あるいは新たな事業に参入されているということではなくて、本業一本でやられています。そういう中で、谷口理事長のおっしゃるように、地域の雇用、あるいは地域の経済を担っていく一躍として、今後、若手経営者として、どう事業に向かっていくのか、ちょっと難しい話になってしまいましたが、よろしくをお願いします。

住田 私も10年出させていただきまして、確かに、公共工事中心に来ているところがありましたので、本当に波がこの10年ありました。例えば「愛知県においても、これから新設の時代じゃなくて、維持管理の時代に入っていますよ」という話を意見交換する度に聞いております。JCメンバーの中にもこのままではいけないと思っている人たちも多いですし、若手も多い。やはり、非常に勉強になるということで、毎年、人数も増えてきているのですが、これから多角化ということで、いろいろ皆さん考えていくことがあるでしょうが、やはり本業があつての多角化ということもあると思うので、環境に対応できる形、維持管理の時代に入れば、維持管理に対応できる形の会社の形態にならざるを得ないですし、その中での延長線の自分の多角化、そういう形を模索してみんなで考えていかなければいけないなと思います。

荒木 ありがとうございました。

本当に住田社長が言われたように、県単位でも事例発表ということで、随分、協会さんとかがやられているのでしょけれど、なかなか近い人の話を聞くと、やっかみもあつたりして、なかなかすんなり聞けないのですが、遠くの人のお話だと、すんなり、良いことやってるなど、素直に認めてしまうという、これも建設業のすごいところ。このトップランナーも北は北海道から南は九州・沖縄まで、いろんな方々がここに一同に来て、まったく利害関係のない中で人の話を聞いて、胸にストンと落ちるといのは、フォーラムが果たしてきた役割の一つなのかなと思います。

野津社長、今後、フォーラムに期待すること、あるいは、方向性、こういうところが変わっていった方が良いとかというご意見があればよろしくお願ひいたします。

野津 もともと建設業がいかにあるべきかを再度、検証して、本業をいかに立ち直すかということも必要じゃないかと。

谷口理事長がおっしゃいましたけれども、特に地方の経済の一役を担ってきているわけですので、本来建設業が持つべき、あるいは安全・安心をするための機会とかいろいろあるわけですので、

で、そういうことを目指して、いわゆるローテクで守るべきかなと思っています。あと、副業の方は、それこそハイテクという古い言葉ですけど、それでも武装しないとできないので、本業は先ほどおっしゃったけど、リフォームとか住宅とか、本来我々がしてきた、すべき仕事を再度見直しして、やっていきたいなど、私は思っています。

荒木 それでは、西山社長、今後の方向性への何か示唆していただければと思います。

西山 いみじくも荒木さんが、近くの人の話はなかなか素直に聞けなくて、遠くの話はストンと入ると言われました。まさに、トップランナーフォーラムというのはそういうことがありまして、遠くの方と交わることができます。いかにも「孫子の兵法」のようでありますけれども。

そういう全国各地で頑張っている、ある種、地域のパワフルトップ、パワフルトップクラスの方々ばかりの集団で、今たぶん、このトップランナー倶楽部の中ではそれぞれいくつかのかけ算というか、この会社とこの会社がコラボして、お互いの商材を売るとか、ビジネスモデルを共有するとかいろいろやってると思うのですが、もう少し、今後、トップランナーフォーラムとか、トップランナー倶楽部で個々がいかにも地域で、パワフルトップでやってきた方々の商材・知財をかけ算しながら、もっともっと全国に発信することが、お互いをかけ算することによって、トップランナー倶楽部というのが、よりパワフルになるのではないのかなと私は思ったりしています。

荒木 ありがとうございます。

だんだん時間も来ました。まとめの方にこれから入らしていただければと思います。実は先ほど昼休みに簡単な打合せをしたが、その打合せが「何とかなるさ」みたいな感じで、10分くらいで終わってしまったので、申し訳なかったのですが、あまり学芸会みたいにABC、ABCって話をしてもつまらないので、今日は、ほぼアドリブで皆さんに振ってしまいました。たぶんアドリブで振っても応えられる方ばかりなので、無茶ぶりもしました。ありがとうございます。

それでは、今日のまとめということで、皆さんから今日ご参加の方々に向かってのメッセージも含めて、一人2分ずつお願いします。それじゃ、西山社長。

西山 このトップランナー倶楽部、トップランナーフォーラムというのは、パワフルトップの方々がこの場所に来て、発表ができる場であり、お互いが啓蒙して、彼もやっているのだから自分もやってみよう、そういう力を感じる、パワースポットではないかなと思う。

それは、かねてからこの会は、米田先生が、我々はそんなにどう猛な猛獣じゃないんですが、ある種、米田サーカスっぽいところがありまして、いつの間にか、米田マジックに惹きつけられながら、こういう場を提供いただいて、非常にパワー溢れるスポットになっていることに感謝をしていると同時に、やはり我々もどんどん世代交代、新陳代謝しなければ、どんどん時代の変化を起こせないし、時代の変化にもついて行けない様な気がして私はならないのです。

だから、今はこういう形でいいでしょうけれど、常にテーマを持って、この会ももっとお互いにパワフルになれる、そして変化を起こすことができる、私はそういう風に、自分も含めてなっていければ良いのかなと思ったりしています。

野津 私第1回から来させていただいておりまして、皆さんの発表を聞いて非常に興奮いたしました。私にこんなことできるかな？という発表もありましたけど、この10年間でいろんな方が成功もされたでしょうし、失敗も数多くあったのではないかと思います。

日経ビジネスで「敗軍の将、兵を語る」がありまして、私は非常に好きですけど、失敗の本質

とか、失敗学があるようです。どうして失敗したかというのも一回検証してみたいな、みたほうがいいのではないかなと思っておりまして、出てくれるのが難しいでしょうけど、米田さんの魅力なら、「ちょっと出てきてくれない？アドバイスしてくれない？」という形であれば、結構出てくれるのではないかと。非常に聞いてみたいなと思っています。本当に興奮しまして、こうしたい、ああしたいと思いながら会社に帰ったものですから、準備が不十分であったり、環境があつてなかったり、今後の参考にしたい。よろしくをお願いします。

住田 私も 10 年前からお手伝いさせていただきまして、私の方は設営の方が多かったけれど、毎回皆さんの発表を見させていただいて、勉強にもなりましたし、いつか私も発表をさせていただいたらなと思ったりもして、10 年がずっと過ぎていきました。やはり設営の大変さというのは毎回思うのですけども、ただ本当に 10 年、本当によくこのフォーラムが続いたなと思っています。

余談ですけど、今、愛知から、フォーラムを愛知でやったらどうかという話も、ちらっと出たりしまして、おそらく今後地方でも、地方から来てらっしゃる方もいらっしゃるので、そういう話しがでるかと思えますし、これからも私なりに、勉強させていただけたらなと思えます。感謝しております。ありがとうございました。

谷口 大学で MOT、マネジメントオブテクノロジーを教えているところですが、共通しているのはバリュー、価値を創造する。経営もテクノロジー、イノベーション。価値を創造するということに意義があるということです。

価値とは何だろうと考えると、目先の利益を否定するわけではないが、目先だけじゃなくて、中長期的なロングスパンの価値を見いだすということなのです。企業も生き物、人間も生き物。1 日 2 食の人も 4 食の人もいるかも知れませんが、食べないと生きていけないので、目先の自転車操業じゃなくて、やはり 10 年、20 年の先をどう見越すかというところが、大事なところだと思います。

人口が減るのに、コンクリートなり、鉄筋なり、目方で、量で考えていては（駄目）。成長を否定する人は別ですが、成長するというのは資本主義、自由主義社会の宿命であれば、サービス水準、質を上げていくところに価値を見いださないといけない。八ッ場ダムも本体工事が着工になっておりますが、民主党に欠けていたのは、コンクリートから人へと乱暴なところがあって、サービス水準を、安全・安心の水準を少しでも上げていこうというのが、開発途上国ではなく資本主義社会の宿命であれば、そういうところに価値を見いだす。それで付加価値を高めて、量じゃなくて質で成長戦略にもっていくのではないと、建設業もなかなか大変なのではないかなと思う。

そういう意味ではデザインとか、景観とか、そういうところにもう少し意義を認めていただいて、付加価値を高めていって、成長戦略に乗っていくことが重要なのではないかな。

マイケルポーターが言ったといわれているのですが、企業貢献、社会貢献、CSR と言われているのですが、彼は、CSV、クリエイティングシェアードバリューと言っている。

先ほど、オンリーワンという話をしましたが、地域とのコミュニケーションにおいて、オンリーワンといわれる、これからの地域の価値、オンリーワンといわれる価値を地域とともに共有しながら、そこに、スーパーゼネコンも地方ゼネコンも、地域とともに、社会とともに生きていく。

そこに共有価値を見いだして、新しい価値を生み出す事業を提案していく。トップランナーがやってこられた介護との連携とか、農林水産業との連携というのは、そういう地域が求めている

新たな価値をトップランナーの皆さんが生み出してきたということではないかということです。

それはこれまでやってこられた、先ほどいいましたけれども、物真似ではなくて、どんどん価値は変わっていく、地域のニーズも変わっていくので、地域とのコミュニケーションによって、新しい事業、新しい価値を生み出す、共有しながら事業を展開していくことが大事なのではないかという感じがします。

荒木 どうもありがとうございました。

皆様から一通り、今日のテーマということで、論点整理、お話しをいただきました。

私も初回から10回連続して携わさせていただきまして、多くの建設経営者の方とこの会を通じて知り合いになったのですが、全員に共通して言えることは、愚痴とかをほとんど言わない。「役所が悪い、積算が悪い」とかが、ほとんどこの会では話題にならない。地域では建設業の方が集まると、発注者が悪いというのが常なのですが、10年間そういう場面にあったことがない。本当に、全国の中で、前向きに常に新しいことに挑戦して、ポジティブに前に進んでいる方が集まってくる。だからこそ、この10年続いたのだと思います。

今回も資料集をちょうどメモリアルということでオールカラーにして、巻頭のところにいろいろ写真も収録しております。これを見ていただくと、10年間が走馬燈のように蘇ってきますけれど、本当にこういうボランティアの会は長続きしないものですが、皆様の支えがあって、今回10回を迎えることになりました。

今後ともいろいろな形で、形は変わりますが、メンバーを含めて新陳代謝しながら、今日そちら側に座っている方々がまた次この回を催す側に回って、どんどん続けていければと思います。時間になりましたので、これでパネルディスカッションIの方を締めさせていただきます。

今日のパネリストの4名の方々に大きな拍手で締めさせていただければと思います。

【第2部 建設業の補運業を磨いて地方創生～新技術、担い手の確保・育成～】

アドバイザー：毛利信二（国土交通省土地・建設産業局長）

本郷浩二（林野庁森林整備部長）

○暗渠の長寿命化のロボット 川崎建設 北海道

[アドバイザー講評]

(国土交通省 毛利土地・建設産業局長)

- ・ちょっと最初驚いたのは、インフラの新設をされていた会社から、誰かに言われた訳ではなくて、メンテの技術の方に転換されるということ。この仕事はおそらく無限に広がっている。
- ・作るのは補助金の限界があると思うし、メンテしていかなければいけない。しかも何年かに1回この仕事が出ると思う。非常に優れた技術開発だと思う。
- ・補助金の方も技術の方へ転換していくことができれば、国費の低減になるところがあるのではないかということが考えられ、非常に驚いた。
- ・さらに農地の土壌構造を破壊せずに、機能回復できるという文が資料の中にあったが、もう請負としての建設業を超えた経営姿勢を感じられた。
- ・待ちの姿勢ではなくて、ニーズをくみ取って、市場調査をされた上で、技術開発をされている。まさに農業というものの基幹産業の持続可能性を建設業の立場から実現させようとして

いるところに感銘を受けた。

- ・攻めの姿勢で産業の持続可能性を、技術開発をもたらすことで、建設業自体も持続可能性が生まれている。非常に期待できるなと思う。
- ・改良の話も、まだ使い道が分からないが、ホタテなどに使えるというお話も、夢のある話もおもしろいなと思うので、頑張っていたきたい。

(林野庁 本郷森林整備部長)

- ・もったいないという意識。これがあるがたいなと思う。
- ・大量生産の時代を踏まえて、「物を買うときに新しい物を買った方が安いよね」と、「メンテナンスはお金が掛かるよね」というのが長く続いた時代が続いた。
- ・長寿命化と簡単に言っているが、寿命を延ばして掛かるお金を減らしていかなければいけないので、そういう感覚でお仕事をされていることには敬意を表したい。
- ・一方で敷設替えした方が儲かるじゃないかということ本来なら各企業の方は思われるが、そこをあえてオンリーワンの仕事、あるいは人と違うことをやらないと儲からないということが、これからの時代だと思うので、そういう感覚で仕事をされていることはすばらしいなと思った。
- ・農地の土壌構造を破壊せずと資料の中にありますが、農家のためにもいいシステムではないかなと思われ、農業と建設業の連携ということですばらしい取り組みだと思うので、皆様もぜひそのような感覚でお仕事をいただければありがたいと思う。

○建設人材の育成と広報 小野組 新潟県

[アドバイザー講評]

(林野庁 本郷森林整備部長)

- ・大変示唆に富んだ内容でした。個人個人の向き不向きはありますが、若年者の存在意義の確認等に思いを馳せて取り組みをしていることは大変素晴らしいと思う。また、自らを問題解決業と位置づけ、問題解決を人任せにしない姿勢が素晴らしい。
- ・乗り越える為の農業とのコラボ（出来れば林業ともコラボしてほしいですが・・・）という話もあったが、今後も努力して良い地域を作り、良い若者を育てて行って欲しいと思う。

(国土交通 毛利土地・建設産業局長)

- ・当初、コーラやカッターナイフ等を引き合いに出した際は、この話が果たして建設業と結びつくのか、などと思った。
- ・問題を逆手に取るのは言っている程簡単ではないと思うが、様々な形で実践しているのは非常に感銘を受けた。昨日は夢で、今日は希望で、明日には現実と、一步一步実現につないできたのは素晴らしい。
- ・フォーラム全体に通じて言えることは、相通じる遠距離の者との付き合いは、思わぬ経済的効果を生み出し、ブレークスルーとなる場合があり、これは社会学でも言われているところ。異業種交流という言葉があるが、小野氏はこれを実践しており、これは大きなシーズ（種）だといえる。
- ・また、建設業を「問題解決業」と定義づける提案は、気づかされるどころ。

○各地のトップランナー紹介

(たかやま林建(岐阜県)、山辰組(岐阜県)、中村建設(静岡県)、加藤建設(愛知県))

[アドバイザー講評]

(林野庁 本郷森林整備部長)

- ・林業、建設業は地域の課題であり、それを解決し、地域のためになる取組で建設業として重要な役目を果たしているのではないだろうか。
- ・建築物あるいは施工場所には木材をもっと使用してほしい。例えば、コンクリート型枠の側面に木材を使ったり、工事用防護囲の鉄板に森林の絵を描くのではなく、木材を使ったりするなど、もっと木材を使用する工夫をしてほしい。
- ・災害に対する社会の課題を解決する取り組みであり、日頃からの問題意識があれば、このように対応できると思った。
- ・地域、社会、業界での課題に自分で解決策を講じている。
- ・建設業の課題を「ユニフォームを変える」という形から入り、色々な切り口から、問題解決している。
- ・人と違うことをすること(only one)は発展の鍵。儲かると他から真似される。そうすると、再び新開発する。会社の利益は社会の利益。業界全体の問題を解決していくことを今後も取組んでほしい。
- ・ひとつ建設業界へのお願いがある。建築物あるいは施工場所には木材をもっと使用してほしい。例えば、コンクリート型枠の側面に国内産の合板を使ったり、工事用防護囲の鉄板に森林の絵を描くのではなく木材を使ったりするなど、もっと木材を使用する工夫をしてほしい。環境や地域の役に立つ取り組みなので、国内木材を使用する取組を推奨してほしい。

(国土交通 毛利土地・建設産業局長)

- ・林建協働の取組は有名で、一度直接話を聞きたかった。建設業からみた林道経営の提案、何が適切な林道整備なのか、経営システムなのか、それは持続可能な林業のためになぜ必要なのかの見解の元に提案されているが、この取組が林業にどのように映っているのかも知りたい。
- ・環境問題への取組は、現場を知っている建設業ならではの提案が面白い。まだまだ今後の展開を期待している。
- ・人手不足、地産地消、工期短縮、色々な効果を持った技術開発だとわかった。地域から全国へ展開されているが、もっと将来にも期待したい。
- ・他社の技術とは違う観点で、建設業は「縁の下の力持ち」だけでなく、カッコいい、中身の濃い産業、夢を形にする産業であることを、若い人や女性へ伝えていくことが大事である。本省でホームページにて建設業の内容を載せても、なかなか見てもらえず、このようなやり方がいいと思う。カッコいい建設業となり、地域のためにモデル的にしてほしい。

【第3部 地域の安全・安心をめざして】

アドバイザー：山田邦博(国土交通省大臣官房技術審議官)

室本隆司(農林水産省農村振興局整備部長)

○宮古市復興と ICT の取組 刈屋建設 岩手県

[アドバイザー講評]

(国土交通省 山田大臣官房技術審議官)

- ・被災地の復興に尽力されており、大変だと思うが、できるだけ支援して参りたい。
- ・人口減少は大変な問題と認識。人口減少をチャンスと捉えている。ICTを使った生産性の向上は、普通の状況では、雇用の問題や社会情勢等がありなかなか進まないが、こういう時期は進むのではないか。
- ・御存知かと思うが、情報化施工用センサーの無償貸与もしており、情報化施工にチャレンジしていただくことが建設業にとって必要。
- ・ICT等の機器を若い人は喜んで操作しており、順応は早い。

(農林水産省 室本整備部長)

- ・人口減少は農林水産業でも重要な課題と従前から認識。技能労働者の減少への対策を考えないといけない。
- ・情報化施工チャレンジ工事は初めて聞く言葉だが、農業農村整備事業でも水路の中にロボットを入れてマネジメントに活用する取組をしている。
- ・北海道は、大区画ほ場整備が進み、平均1ha、5～7haという大規模な区画の地区もある。人力で代掻きや田植をすることは効率が悪いため、自動運転で代掻きをする等、ICTは特定の分野に限らず、重要なツールであると実感。

○災害復旧と情報発信 磯部組 高知県

[アドバイザー講評]

(農林水産省 室本整備部長)

- ・現場での苦労は住民には見えない。もっと早く復旧出来ないのかといった批判的な論調に変わってしまう。最近、SNSなどの普及により、ローコストにより現場からの情報が発信出来る。現場からの情報発信が大切である。

(国土交通省 山田審議官)

- ・情報発信をためらってしまうこともあるが、伝えようとする気持ちが大切である。
- ・大概の場合、現場を見てもらえれば、建設のことを好きになってもらえる。
- ・「ゆうこさん」のような感謝の言葉ばかりではなく、「反ゆうこさん」の意見も大事にしなければならない。

○震災と復興を経験した兵庫からの報告 日本青年会議所建設部会 兵庫県

[アドバイザー講評]

(国土交通省 山田審議官)

- ・近年、ゲリラ的な豪雨も多く、機動的な活動も求められている。国では、品確法を改正し、建設業の担い手確保・育成を図っている。
- ・処遇、誇り、将来性の3つが大事であり、やりがいのある現場を一緒につくっていきたい。

(農林水産省 室本整備部長)

- ・建設業は、地域の雇用を生み、地域に人口を定着させる。このことが、マスコミ等に取り上

げられることが少ない。皆さんもじくじたる思いと推察する。

- ・建設業が、国土強靱化やインフラのメンテナンスに多大な貢献をしていることを、発信していくことが大事である。

○各地のトップランナー紹介

(中綱組 (青森県)、会津土建 (福島県))

[アドバイザー講評]

(農林水産省 室本整備部長)

- ・予算が厳しいため、国でも施設の耐用年数を延ばすこととしている。このような企業の取り組みを活かし、官民連携して長寿命化を図ってまいりたい。
- ・CLTは、昨年11月にロードマップを作成し、平成28年早期に建築基準の整備を行う予定であり、本年度の骨太の方針にも盛り込まれた。

(国土交通省 山田審議官)

- ・インフラの長寿命化は予防が大事である。夫婦関係と同じである。
- ・国では、新技術の導入も考えており、人工衛星による点検の実証実験を行っている。
- ・CLTの話しはロマンがある。日本で木造の高層建築が実現すれば素晴らしい。

【パネルディスカッションⅡ 「インフラの町医者をめざして」】

パネラー：大石久和 (国土技術研究センター所長)、長瀬雅彦 (長瀬土建社長)、深松努 (深松組社長)、
内山雅仁 (内山建設社長)、飯田誠次郎 (日本青年会議所 2015 年度建設部会長)

コーディネータ：米田雅子 (建設トップランナー倶楽部代表幹事)

米田 本日は「インフラの町医者をめざして」として地方創生をテーマに掲げている。地方創生のために地域建設業は何が出来ののだろうか、すべきであろうか、ということで議論を進めてまいりたい。

建設トップランナー倶楽部は、地方創生のトップランナーでもあったのではないかな。

最初に思いのたけを、それぞれお話し願います。

内山 地方における建設業は生活道路など必要な機能をつくり守っている。地元経済に貢献している。奉仕活動で不可欠な存在である。何か相談したら助けてくれるとの期待される存在である。

しかしながら、道路の利便性は使わない人には分からないし、分かったとしてもそれを作った建設業の存在を思ってもらえない。一般の人達に、なかなか存在価値を理解してもらえない問題がある。

長瀬 地方創生「まち・ひと・しごと」の話しをさせていただく。地方の付加価値がないと、真に地方は活性化しない。加えて潜在力を引き出していくほど地方は活性化する。縮小していく局面で、後ろ向きではない「下山の思想」を持つことも大事である。しあわせに暮らせる家族が、地方でいかに増えるかが地方創生ではないかと考えている。「地産・地消」から「地産・地商」へと変えていかなければいけない。

建設業が出来る地方創生は、地域の実情に合わせて、地域の皆さんと力を合せて成し遂げられるものであり、参入した反対側にある業種の発展も考えなければいけない。

少子高齢化により我々の仲間も減っていく中、建設業の魅力発信の戦略的広報活動を真剣に行わないと間に合わない。

深松 被災地からの視点でお話しする。宮城県は昨年が発注のピークであり、これから仕事が減っていく。秋田では潰れた会社が出始めている。地域の業者が無くなってしまうと除雪も出来ない。

地域の業者を守らないと、地域が破たんしてしまう。官民一体となって地域を守る。特に田舎から固めていかないといけない。

地震により家が傾いた。在来工法の修繕は、大工さんが現場で作業しないと出来ない。大工さんがいないため、東北の規模でも2年かかっている。東南海や関東などが震災に見舞われれば、おそらく10年はかかってしまう。この対策は急務である。

建設業は国防である。建設業以外の一般の方には、この状況を理解してもらっていない。

大規模地震は必ず来ることがわかっている。今のうちに出来ることをやらなければならない。

飯田 建設業に何が出来るか、しなければいけないのかについて、全国の支部から意見を集約した。技術の継承ということもあるが、「地域」という部分に着目している人が多い。地域の魅力・特性を良く理解したうえで、地域に根差した事業を行っていくことが大事だということ。ボランティアであったり、お祭りなどを通して、地域とのコミュニティーの形成が重要である。これにより建設業が活性化し、災害時にもコミュニティーが有効に活動してくれるのではないかと考える。

また、私たちの世代は、若手の確保、若い人材をどう育てていくかを一番心配している。建設業の魅力の発信が重要である、

大石 深松さんの言ったことが極めて重要な指摘。建設業のように「いざ」というのは供給能力の問題である。需要が無くなると供給力も無くなっていく。この国から供給力が失われていくことが大問題。

地方創生のかなめとしての建設業は、つまりは雇用主体として、建設業あるいはそれ以外の産業で雇用を生み出すことが重要である。

地方建設業の役割というのは、地域社会の基幹産業として、社会に役立つ産業として、あり続けてほしいということである。

米田 今、大石先生が言ったことは、本日お集まりのトップランナーの皆さんは、地域、特に過疎地域の雇用を支え続けているということ。今の話は的を得ており、わが意を得たりという思いである。

深松さん、これから東北は厳しくなると思うがどうか。

深松 復興予算も激減しており、舗装工事は1円単位の競争がまた始まってしまった。仙台市や宮城県も次の復興プランをどうしようかということで、我々の意見もだいぶ取り上げてもらっているが、これがベストというものが、まだ出てこない。

3年前に、大工さんの会社と「巧の右腕」というNPO法人を立ち上げた。大工さんを育てたいということから作ったものであり、2年間大工塾をやったら結構人が集まった。3年目の今年から、工業高校や専門学校で1年間のカリキュラムで墨付けから刻みから物置を作ってもらう。他には大工さんの就職セミナーや婚活パーティーなども実施している。

現場の大工さんが60代後半となっている。今からやらないと間に合わない。経験工学である全ての職種の皆さんがやらないといけない。

高山市 副市長 昨年1年間で5つの災害本部を立ち上げた。豪雨、熊、豪雪、火山噴火、マイマイ蛾の対策本部である。想定外の事態が結構ある。しっかりとした技術を持った建設業の皆さんに市民生活を守っていただいている。市民が安全に暮らすことの出来るまちづくりを、一緒に進めさせていただく。

長瀬 建設業はノウハウがあつて様々なことに機転がきくので、地域の皆さんと連携してやっていきたい。

深松 宮崎県も口蹄疫があつた。自衛隊にも出動いただいた。埋め立ての作業ではスピードと精度の点で建設業のオペレーターの方が優れていた。我々は日々の仕事の中でスキルが上がっており、しかたないこと。こういう緊急対応の時に、建設業の持つスキルが活かされる。

大石 私が今日是非言いたいことがある。若者は自分のスキルが向上していくことに喜びを感じるものであり、これは人間の本能的なものであると思う。ところが都会で働く非正規の若者たちにはこの喜びは感じる事が出来ない。建設業の現場には、この喜びの場があふれている。

飯田 建設業はどんどん身につけていく。自分も父の背中を見ていて建設業の道に入った。我々も自分たちの姿を子供たちに見せて、建設業の楽しさ・魅力を伝えていくことが大事である。

内山 この業界は特殊、特殊と言われるが、確かに職人にしても現場監督にしても、自分たちは一生懸命やっているから周りにわかってもらえなくても良いという雰囲気がある。情報発信も大事であるが、地に足の着いた地味な活動も大事である。

深松 今年のがが社の新入社員は、中学2年の時に東日本大震災の津波を経験した。45号線で渋滞に合い、自分が乗った車が津波により浮いた周りで、逃げ惑う人々が沈んでいくのを目の当たりにした。

この社員が言った言葉を一生忘れない。「あの地獄を直してくれたのが建設業である。自分も役に立つためにこの会社に来ました。」これが私たち産業の持つ大きな使命である。

長瀬 新しいことを始めるよりも、古い考えを捨てることの方が難しい。だからこそ自分たちが今何を出来るのか。人は出来ないことから言い始める。何が出来るのか、何をしたら良いのかを考えれば、地方創生はうまくいくと思っている。

内山 「インフラの町医者をめざして」というテーマであったが、本物の医者は、患者に相對することで存在意義を認められる。我々は相手が構造物であるため、残念ながら認めてもらうことが出来ない。

この現実を受け止めて、いかに我々の評価を高めていくかが課題である。

また、我々の業界のカルテとは何かと考えたとき、資材等の備蓄の状況を把握することも大事である。宮崎の建設業界もこのカルテを作成しようとして取り組んでいる。

作業員の皆さんの活躍を是非、知らしめていくことが、若者の入職に繋がるものと考えます。

飯田 JC建設部会としては、若者に注目している。本日、加藤建設様の発表があつた。ユニホームを新しくデザインすることは、自分も考えたことであり、少し変わった視点から、建設業の魅力イメージアップというものを考えていく必要がある。

大石 社会のベースは変わり始めていると思う。若者の多くは、緑豊かな水のきれいなところで子育てをしたいと考えている。世界を見ても先進国で、人口が一極に集まっているのは日本だけである。

「ここにしか無い物が、ここに有ることを誇りとする」というフェーズの切り替わりが始まっ

ているのではないかということである。

それぞれが持っている地域の資源を、どのように見出し、どのように売り出すのか。それに私たち建設業がいかに関係していくのかが、大事になってきている。

本日はどうもありがとうございました。

○閉会の言葉

①歴代 日本青年会議所フォーラム実行委員長挨拶

- ・ 久力一雄（第1回委員長）
第1回のフォーラムはここ（建設会館）とは違う会場だった。当時は特にシナリオに気をつけていた思い出がある。
- ・ 横川一秀（第2回委員長）
開催1週間前から寝ないで資料作りしたのを思い出される。
- ・ 松永潤一郎（第3回委員長）
第3回から会場がここ（建設会館）になった。現在は住宅関係の仕事をしているので、地域を盛り上げるのにフォーラムの経験が役に立っている。
- ・ 飯田誠次郎（第5回委員長）
第1回の中からトップランナーフォーラムに携わっている。宮城県の復興支援の取組発表の機会もあり本当にいろいろ世話になった10年でした。
- ・ 小林勝幸（第6回委員長）
3.11の震災もあり、トップランナーフォーラムのプログラム内容も大きく変更となり大変であった。当時は皆が素晴らしい力を発揮していた。
- ・ 草刈健太郎（第7回委員長）
現在の取り組みは作業員不足対策として、外国人の研修や、刑務所などを出た人たちを積極的に建設業で雇用するといった取り組みを行っている。近々NHKの「かんさい熱視線」で取り上げられ放映予定です。
- ・ 真鍋浩章（第8回委員長）
毎回参加して皆様からパワーを頂いている。来年も引き続き宜しくお願いします。
- ・ 三浦智（第9回委員長）
JCとしても若い力を活かして自分の地域からイノベーションを起こしていきたい。

②日本青年会議所27年度フォーラム実行委員長 市川慎次郎

皆様本日はお疲れ様でした。今日一日いろいろなことに取組み行動する建設業の姿を知り、同じ経営者として感銘を受けました。このトップランナーフォーラムの火種を全国へと広げていきたいと思えます。ありがとうございました。